慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	組踊「執心鐘入」考 : 主題と構成
Sub Title	A study of kumiodori "Shushinkaneiri" : the theme and the composition
Author	竹鼻, 美玖(Takehana, Miku)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2024
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.126, (2024. 6) ,p.17 (168)- 35 (150)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01260001-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

組踊「執心鐘入」考—主題と構成

竹鼻　美玖

はじめに

「執心鐘入」は、沖縄県の伝統芸能の一つ、組踊の演目である。組踊は、琉球国王の代替わりごとに中国から新国王に冠を授けに来る使者、冊封使歓待の式典の余興芸能として、玉城朝薫（一六八四－一七三四年）によって創作されたと言われている。冊封使は総勢四、五百名で、二、三年前から準備をし、国賓としてもてなした。

組踊が初めて上演されたのは享保四年（一七一九年）の重陽の宴であった。「二童敵討（護佐丸敵討）」・「執心鐘入（中城若松）」の二組である。その後、「銘苅子」「孝行の巻」「女物狂」の三組が作られたと言われている。これら五つの組踊は五番または五組と呼ばれ、後の組踊（諸作家につくられたものも含めて約五十番）とは区別されている。朝薫は首里の士族出身であったが、土着性の強い演劇的要素のある芸能にひかれ、それらをもとに、本土で見聞きした能[1]や狂言などの要素を取り入れて組踊を創作した。以下に、朝薫の五番が影響を受けた、似ていると言われている能の演目を挙げる。

「二童敵討」:「小袖曾我」・「放下僧」・「望月」
「執心鐘入」:「道成寺」・「黒塚（安達原）」
「銘苅子」:「羽衣」
「孝行の巻」:「大蛇」・「張良」・「生贄」・「田村」
「女物狂」:「桜川」・「三井寺」・「隅田川」

「執心鐘入」は能「道成寺」との関連が度々指摘されるが、単なる琉球版「道成寺」と考えて良いのであろうか。

一　道成寺伝説と後日譚

道成寺伝説の最も古いものは、『本朝法華経験記』巻下第百二十九話である。その他『今昔物語集』巻十四第三、『元亨釈書』巻第十九願雑十之四霊怪、絵巻『道成寺縁起』（道成寺蔵）にも同様の伝説が描かれる。それぞれのあらすじを簡単に述べておく。

『本朝法華経験記』巻下　第百二十九話　紀伊国牟婁郡の悪しき女[2]

熊野詣でに向かう二人の僧がいた。一人は若くて美しく、もう一人は年老いていた。僧たちは牟婁郡で宿に泊まることにした。そこの主人は寡婦であった。女主人は若い僧に恋慕する。僧は熊野詣での帰りに寄ると約束して宿を発つが、数日待っても僧は現れず、往来の人に尋ねて、女は裏切られたことを知る。女は家に籠ってその身を大蛇に変じ、僧を追いかける。僧は道成寺の鐘の中に隠してもらう。寺まで来た大蛇は、鐘を巻き、尾で竜頭を叩き、やがて寺から出て行く。鐘は大蛇の毒で焼かれており、中の僧も焼き尽くされて骸骨も残らなかった。数日後、上薦の僧の夢に、大蛇が現れて言うことには、自分は鐘に隠してもらった僧であるが、遂にあの女と夫婦となった。この苦しみから脱したい

が、自分は生前の修行が足りなかった。どうか法華経の如来寿量品を書写して、二蛇を救ってほしい、と言うのである。夢から覚めた上臈の僧が如来寿量品を書写し、法会を行うと、その夜の夢に一人の僧と一人の女が満面の笑みを浮かべて現れ、女は忉利天に、僧は兜率天になったと言い、それぞれ虚空に去って行った。

『今昔物語集』巻十四第三　紀伊国道成寺僧写法花救蛇語[3]

内容は『本朝法華経験記』のものとほとんど同じと言って良いが、女は僧の裏切りを知ると寝室に籠って死んでしまう。それを家の下女が悲しんでいると、女はたちまち大蛇となって、僧を追いかける、という展開になっている。

『元亨釈書』巻第十九　願雑十之四　霊怪六　安珍[4]

物語の筋は『法華験記』、『今昔物語集』と同様である。しかし、女の恋慕の対象となる僧が、鞍馬寺にいた安珍と設定されている。女は安珍の裏切りを知った後、家の中に閉じこもり、一夜明けると大蛇になって安珍を追いかける。

絵巻『道成寺縁起』[5]

醍醐天皇の御代、八月に、奥州から熊野参詣のため、若くて見目美しい僧が、紀伊国室郡真砂にある、清沢庄司の家に泊まる。庄司の娘が宿の亭主であった。その女は僧に恋慕する。夫になってくれと言う女に対し、僧は熊野参詣を果たしたらと約束し出発する。しかし、日数を経ても僧は戻って来ず、道行く人に尋ね、女は裏切られたことを知る。女は僧を追いかけながら、少しずつ上半身を蛇体に変化させ火を吐く。日高川を渡るところで、全身大蛇となる。僧は道成寺に逃げ込み、鐘の中に隠してもらう。寺に到達した大蛇は、お堂の戸を叩き破り、鐘を巻いて龍頭をくわえて尾で叩く。火焔が燃え上り、大蛇は血の涙を流して去る。僧は墨のようになって骸骨だけが残った。数日後、ある老僧の夢に、二匹の蛇が現れる。蛇は、自分は鐘に隠してもらった僧で、例の女と夫婦になったと言う。法華経を書写して供養

してほしいと頼んだので、目覚めた老僧がそのようにすると、今度は老僧の夢に二人の天人が現れ、女は忉利天に、僧は兜率天に生まれ変わったと言い、それぞれ虚空に向かって去って行った。

設定の詳細さや、女の変身の様子などに違いは見られるが、話の骨子は以下のような流れで一致している。

宿の女が客の僧に恋慕する
←
僧の裏切りにより女が大蛇に変身する
←
鐘に隠れた僧を鐘ごと焼き殺す
←
後の供養で二人は成仏する（後日譚）

物語は、法華経の利生譚、僧と女の成仏譚となっている。

また、異本として、『賢学草子』（根津美術館蔵）の系統があるが、これも僧の逃走→女の追跡→女が僧を取り殺す、というおおよその内容は一致している。しかし、物語は女（花姫とされる）が幼い頃から始まるなど大きな違いも見られる。こちらも簡単な内容を以下に示す。

『賢学草子』[6]

三井寺の僧賢学が、自分と結ばれるとされた花姫（当時五歳）を、修行の妨げを除くために刺して逃げるも、年を経て清水寺参籠の際に再会した花姫と、それとは知らずに契る。胸の傷からそれが花姫であると知り別れるも、追って来る

花姫は日高川を渡って大蛇となる。大蛇はある寺の鐘に隠れた賢学を捕え、日高川の淵に沈んで行く。悲劇を伝え聞いた賢学の弟子たちは大いに悲しみ、賢学の弔いをした。

最後の弔いの場面はさほど詳しくは描かれず、賢学や花姫の成仏の様子も見られない。この話は、法華経の利生譚、僧と女の成仏譚ではなく、因縁の深さを描いた作品となっている。安田徳子氏も、この『賢学草子』は「今まで見てきた説話群と位相を異にしている[7]」と述べており、異本の一つであることに間違いないが、純粋な道成寺伝説とは分けて考えるべきであろう。

さらに安田氏は、万治三年刊の『道成寺物語』について「いわゆる後日譚が二重になっている[8]」と指摘している。『道成寺物語』の構成は、

上巻：熊野詣の道行
中巻：道成寺伝説（女が僧を焼き殺すまで）
下巻：鐘の再興、僧と女の成仏

となっている。このうち、道成寺に関わる中巻、下巻の内容に着目し、道成寺伝説と構成の比較を行うと、表一のようになる。

〈表一〉

	現在	後日譚①	後日譚②
道成寺伝説	男が女の宿に泊まる	男の逃走、女の追跡	女、男を焼き殺す	×	二人の供養
『道成寺物語』	男が女の宿に泊まる	男の逃走、女の追跡	女、男を焼き殺す	鐘再興 女鐘入り、変身	二人の供養

鐘の再興の話が最初に見られるのは、安田氏によると能「鐘巻」である。これを簡略化したものとして、能「道成寺」が現代に伝わる。この能について安田氏は以下のように述べている。

この能は道成寺伝説の後日譚のみで成り立っている。しかも、この後日譚はそれまでのもののような法華経の功徳を説く解脱譚ではない。ここでは、蛇体が白拍子に姿を変えて鐘供養の場に現れ、恨みの鐘を落として籠るのである。この蛇体は成仏を願ったりしてはいない。鐘に恨みをぶつけ、悪意をそのまま発動して祈り伏せられ、川に飛び込んで逃げるのである。

（中略）

もはやこの能においては、女の後日だけが問題なのである。妄執で迷いでた女も鐘への執心を見せるのみで、男への執着は語らないのである。[9]

能は「女と鐘」を物語の主眼とし、鐘の再興という後日譚のみで構成されている。一方、道成寺伝説は、話の背景と化している。

なお、後の歌舞伎や浄瑠璃でも、物語の中心は鐘入りの場面であり、伝説の前半部分を描いた場合も、女の嫉妬は別の女によるものとするなど、大きく改変されている。

道成寺伝説をもとにした演劇は、女の鐘入りを山場としており、特に能は、本来伝説では見られない、鐘の再興の後日譚のみで構成されている。道成寺伝説が説話から演劇に形を変えるにしたがって大きく変容し、独自の展開を見せている様子が窺える。

二　「執心鐘入」の構成と主題

ではここで、組踊「執心鐘入」のあらすじを確認しておく。

組踊「執心鐘入」[10]

美少年の中城若松は、奉公のために首里へ向かっていた。途中、日が暮れてしまったので、一晩泊めてもらおうと一軒の家を訪ねる。その家では女は一人で留守番をしており、親が留守なので泊めることはできないと言う。しかし、若松が名乗ると、女は美しいと有名であった若松に思いを寄せていたので、家に泊める。女は思いを遂げようと眠っている若松を起こすが、若松はこれを拒み、女のもとから逃げ出す。若松は末吉の寺[11]に逃げ込み、座主に助けを求め、鐘の中に隠してもらう。座主は寺の小僧三人に、女を決して寺に入れないように言い、鐘の見張りをさせる。その後若松を追って来た女を、小僧たちは追い返そうとするが、結局寺に入れてしまう。座主は女のただならぬ気配から、若松を鐘から出して逃がす。女は鐘に飛び込み鬼に変化するが、法力によって退散させられる。

道成寺ものの演劇は、多くが鐘入りを作品の中心としている。特に能では後日譚のみであり、女が鐘に対する執着心から大蛇に変身する。歌舞伎のように軽業を取り入れた演出なども見られ、女の鐘への執着と、その視覚的な演出を見所とする。

「執心鐘入」には、やはり女の鐘入りの場面があり、鬼となって姿を現す際も、歌舞伎などで見られる宙吊りの様式を採用している。女の鐘入り、変身を作品の山場と考えていることは、他の道成寺の演劇と一致している。しかし、「執心鐘入」で女が鐘に入ったのは、鐘に対する執着からではなく、下ろされている鐘を不審に思ったからであった。女の変身の要因は、自分を拒否した若松に対する執心である。これは道成寺伝説の内容に一致する。本田安次氏が「こうした本土の（引用者注：道成寺の）諸伝説を参照してみるに、沖縄のは、むしろ「法華験記」の原話に大筋において似ている。[12]」と指摘するのはこのためであろう。演劇では説話の前半部分、すなわち男が女の宿に泊まる場面、そして、男の逃亡、女の追跡が描か

れない。この部分を描いているのは、「執心鐘入」の特徴と言える。漠然とした鐘への執着ではなく、前半部分に女が変貌する要因となる出来事を描くことで、単に視覚的な面白みを提供するにとどまらず、明確な主題を持った作品となっているのではないだろうか。しばしば能との類似性を指摘される組踊であるが、ここに決定的な差異を見出せるのである。矢野輝雄氏は、

組踊りはしばしば能に比較されるが、正方形の舞台や橋懸りなどにも、能の影響が指摘される。そればかりでなく、素材的にも能との共通性が指摘される。例えば、朝薫作の「執心鐘入」と能「道成寺」、また「銘苅子」と「羽衣」、「女物狂」と「桜川」や「隅田川」、「二童敵討」と「小袖曾我」、「孝行の巻」と「生贄」というように、物語素材の類似性が説かれる。これら五つの作品は玉城朝薫の五組み、あるいは五番と呼ばれ、今日でも上演頻度の多い作品である。しかし、これらの題材の類似性のみをもって能との比較をすることは必ずしも当を得ない。何となれば、似通った説話は東西にあり、筋だては似ていても能と組踊りは作品の持つ主題が一致しないからである。たとえば「執心鐘入」は後半の詞章と構成は能「道成寺」によっているが、作品としての中心は前半の、若松に言い寄る一つ家の女との問答、そして断られた女が鬼女に変わってゆく部分にあり、女性の執心ゆえの哀れと怒りに作者の狙いが見られる。[13]

と、作品の前半部分に注目している。

ここで、「執心鐘入」の構成を確認する（表二参照）。矢野氏が作者の狙いが表れていると指摘し、女が若松を追う原因となった出来事を描く前半部分は、道成寺伝説と一致している。では、この前半部分に注目し、「執心鐘入」の主題を考えてみたい。

〈表二〉

道成寺伝説	現在	男が女の宿に泊まる	男の逃走、女の追跡	女、男を焼き殺す
		×		後日譚 二人の供養
「執心鐘入」	現在	男が女の宿に泊まる	男の逃走、女の追跡	女、男を焼き殺す
		女の鐘入り、変身		×
能「道成寺」	×		後日譚 女の鐘入り、変身	
				×

道成寺伝説は、法華経の利生を説く説話として語られた。僧である男に宿の女が恋慕する。叶わぬ思いであるにも拘らず、女は執拗に迫り、男は逃げ出す。女は大蛇に姿を変えて男を取り殺すが、後の供養で二人は救われる。僧に恋慕するという、仏教の妨げとなる女でさえも救済され、女性への戒めや、法華経への帰依を促す意図が強く窺える。

では、「執心鐘入」の主題とは何であろうか。女は祈りによって退散させられるので、仏の利生を全く描いていないとは言えない。しかし、若松は僧ではないので[14]、女は仏教と敵対する存在ではなく、物語を仏の利生譚と考えるには弱い。

若松は、奉公をするために首里へと向かう少年である。僧ではないので、女の恋慕は叶わないものではない。女の恋慕は純粋なものであり、仏の道を妨げるものではない。つまり、「執心鐘入」においては、道成寺伝説のような「〈仏教〉対〈それを妨げる女〉」という対立構造とはなり得ないのである。女が妨げるのは、若松が奉公に向かうことである。首里に奉公

に行く若松は、すなわち王府の側の人間であり、それによって、「〈王府〉対〈女〉」という対立が見て取れる。

最終的に女は祈りで退場し、若松は助けられ、その後無事に奉公を果たしたことが予想される。男を殺すことで一定の勝利を収めたとも言える道成寺伝説とは異なり、「執心鐘入」では、女と対立する側、すなわち王府側の完全勝利となる。琉球の国王を認めるために訪れた冊封使を接待する場において上演するに相応しい内容だと言えよう。王府を称賛するということがこの作品の最大のテーマであると推測される。これは他の道成寺ものと比較した際、大きな特徴だと言える。

三　比重を置く人物

ここで少し視点を変えて、道成寺伝説、能「道成寺」、「執心鐘入」が、いずれの人物に最も重点を置いているのかを検討してみたい。道成寺の物語と言えば、「安珍清姫」という言葉が浮かぶが、それぞれの物語は、大蛇（「執心鐘入」では鬼）となる女と相手の男のどちらにより重きを置いているのだろうか。

能「道成寺」では、男は過去の事件を語る寺の僧の話に出てくるのみで、実際には登場していない。したがって能は間違いなく女の物語である。

道成寺伝説は、僧と女の成仏譚であると考えると、男女両方、または登場人物そのものではなく、二人の間に起きた出来事に主眼があるように思われる。『今昔物語集』に掲載された説話の題も「紀伊国道成寺僧写法花救蛇語」となっている。『元亨釈書』では「安珍」と題しているが、この話は霊怪の章段に属しており、安珍が遭遇した事件に注目しているのであると推測できる。『本朝法華経験記』の説話の題は「紀伊国牟婁郡の悪しき女」であり、こちらはかなり女の方に重点を置いているように感じられる。

また、伝説の内容から考えると、旅の僧に思いを寄せた女が、裏切られたことで嫉妬の炎を燃やして大蛇になるのに対し、相手の僧はその大蛇を前にして、なす術もなく焼き殺されてしまうので、女の方が強烈な印象を残す。特に『道成寺縁起』では、絵巻という形を活かして、女の変身の様子を段階的に描いており、より女の変化の印象を強くしている。さらに

物語終盤には、「女人のならひ、高も賤も、妬心を、離れたるはなし」[15]という文言が見られ、単なる僧と女の成仏譚ではなく、女性への戒めを強く表したものになっている。

以上のことから、道成寺伝説の最も注目すべき点は、僧と女の間の事件そのものであるが、女の方の印象が幾分か強く、とりわけ『道成寺縁起』では、女性教化を狙ってか、その傾向がいっそう表れていると言えよう。

次に「執心鐘入」であるが、話の前半部分は道成寺伝説と似ている。また、女の変身が見所となっており、一見すると女に重点が置かれていると思われるが、その女は祈り伏せられて退散することになる。その上、女の標的であった若松は、当の女が変身したときには座主に逃がされており、女は全く手出しできなかったわけである。隠れた鐘ごと僧を焼き尽くす道成寺伝説の女とは、随分異なった印象を受ける。

さらに、男にのみ「若松」という名が与えられているのも注目に値する。『元亨釈書』でも、相手の僧にのみ「安珍」の名があったが、若松にはモデルと思われる人物の存在がある。[16]男にのみモデルとおぼしき人物がおり、作中に名前も出ているのは、男の方を重要視していることの表れに他ならない。「執心鐘入」の別名として、「中城若松」があるが、これも同様に、若松をこの物語の中心と考えたからであろう。

その若松は、女の妄執の凄まじさを表すがごとく取り殺されてしまうのではなく、座主の機転により助けられ、生き延びるという結末を迎える。「執心鐘入」は、従来の道成寺ものより男の側に比重を置き、首里へ向かう若松が、苦難を乗り越え奉公を遂げるという、若松を中心に据えた物語となっている。言わば「執心鐘入」は、若松の物語なのである。これも、「執心鐘入」を王府礼賛の物語として描いた結果なのであろう。

四　組踊「銘苅子」との比較

次に、組踊の作品で、「執心鐘入」と同様、有名な伝説を題材にした「銘苅子」との比較をしてみたい。「銘苅子」は、いわゆる羽衣伝説を描いた作品である。

まず、「銘苅子」のあらすじを以下に述べる。

組踊「銘苅子」[17]

農夫の銘苅子は、天女が井泉で髪を洗っているのを見つけ、松の木に掛かった羽衣を隠してしまう。銘苅子に羽衣を奪われたと知った天女は、返してほしいと頼むも、銘苅子は天女に、自分の妻になれと言う。問答の末、天女は銘苅子と夫婦になる。その後、二人の間には一男一女の子ができる。ある日、弟のお守りをする姉の口ずさむ歌から、天女は羽衣の隠し場所を知る。羽衣を取り返した天女は、我が子との別れを惜しみながらも昇天する。母を失い悲しむ子どもたちを慰める銘苅子のもとへ、王の詔勅を伝えるために、王府の使者がやって来る。銘苅子親子の不思議な出来事を知り、娘を城内で育て、息子は成長したら取り立て、さらに銘苅子にも位階を賜ると言う。親子は思いがけない幸せを得て、あの松と井泉のおかげだと感謝する。

続いて、「銘苅子」に影響を与えたとされる、能「羽衣」のあらすじも確認する。

能「羽衣[18]」

三保の松原に住む漁師、白龍は、松の枝に美しい衣が掛けられているのを見つけ、家の宝にしようと持ち帰ろうとする。そこへ羽衣の持ち主である天女が現れ、羽衣を返してほしいと頼む。白龍はそれを拒むが、羽衣がないと天に帰れないと嘆く天女を哀れに思い、舞を見せてもらう代わりに羽衣を返すことにする。天女は羽衣を纏い、舞を見せると、霞に紛れて姿を消す。

一般に羽衣伝説の筋書きは以下のようなものであると、矢野輝雄氏は述べている。[19]

①水浴びする天女の飛衣を男が見つけて隠す。
②隠す場所は高倉の中である。
③天女は男の妻となり、子供が生まれる。
④子供の子守歌で羽衣の隠し場所を知る。
⑤天女は昇天する。

「銘苅子」は、能の内容より、この伝説の筋に類似しているように思われる。このような伝説は各地に存在し、沖縄にも同じような話が確認できる。複数の書物に見られるが、ここでは琉球最初の正史である、『中山世鑑』の内容を簡単に示しておく。

『中山世鑑』巻二　大元至正十年庚寅察度王御即位[20]

貧しい農夫の奥間大親が、水浴びをしている天女を見つけ、その羽衣を奪い隠す。そうと知らない天女は、羽衣がないため帰れないと泣く。羽衣を探してあげるから、その間家で休めば良いと奥間に言われ、天女は感謝し、奥間の世話になることにする。その後二人は夫婦になり、一男一女を儲けるが、弟のお守りをする姉の歌から、天女は羽衣を見つけ、子どもとの別れを惜しみつつ天へ戻る。

この後「銘苅子」のように、王府の使者が来る場面はないが、天女の息子が、婿選びをしている勝連按司の娘に求婚する場面へと続く。按司と家来は、貧しい彼を見て大笑いし、追い返そうとするも、物陰から見ていた娘は、その若者がただ者でないことを悟り、二人は結婚する。後にこの若者は中山王察度となったとする。

「銘苅子」、能「羽衣」、沖縄の羽衣伝説の構成を図にすると、次の表のようになる。

〈表三〉

「銘苅子」	問答の末、男と天女は夫婦に	一男一女を儲ける	天女、子の歌から羽衣発見		王府の使者到来一家は幸福に
能「羽衣」	男、天女を発見羽衣を隠す	男と天女の問答舞と引き換えに羽衣を返す	×	×	天女昇天	×
『中山世鑑』羽衣伝	羽衣を探してもらう間、天女は男の世話になるやがて二人は夫婦に	一男一女を儲ける	天女、子の歌から羽衣発見		天女の息子、後に王となる

これを見ても分かるように、「銘苅子」は、現地にも伝わる羽衣伝説の影響を強く受けている。特に、天女が昇天した後のエピソードが描かれているという点は、一般的な伝説の流れでは見られなかったものである。

沖縄に伝わる羽衣伝説では、天女の昇天後、王府の使者が現れる場面はなく、成長した天女の息子が王になったと語られる。一方「銘苅子」では、天女の子が王になるわけではないが、娘は城内で養育されることになり、息子は将来、王府で取り立てることを約束される。さらに、銘苅子も位階を授けられるなど、一家にこの上ない幸福がもたらされる結果となる。最後の場面は、伝説にはない創作であるが、天女との出会いに端を発して、後に家族が繁栄するという結果は、沖縄の伝説が意識されていたのであろう。

さらに、物語の結末を、時を経て息子が王になるのではなく、羽衣をめぐる出来事の終わりと時を同じくして、一家全員が幸せになるというものにすることで、見ている側から分かりやすい内容となっている。また、この改変によって、銘苅子

一家の幸福が、王府によってもたらされるという形になる。「執心鐘入」同様、王府賛美が物語の重要な要素となっているのである。

ここで、同じように有名な伝説をもとにできた、「銘苅子」と「執心鐘入」を比べてみたい。

「銘苅子」は、現地にも伝わる羽衣伝説を直接の題材にしている。特に、天女昇天後の一家の繁栄は、在地の伝承を意識しており、その場面の存在により、一般の羽衣伝説にはない、王府礼賛の意が描かれた。各地に存在する羽衣伝説をもとにしながら、その中でも沖縄らしい部分をうまく利用し、作り上げられた作品と言える。

一方「執心鐘入」は、道成寺伝説と、能などに描かれる鐘再興の後日譚を組み合わせたものになっている。王府礼賛の物語にするには、若松が無事に首里の奉公を果たさなければならない。そのためには、男が大蛇に取り殺されるという伝説の結末も、伝説の悲劇を前提としている鐘再興の物語も相応しくない。そのため、話の筋は伝説のものを使いつつ、最終場面は能で描かれる後日譚の話を持ってくる形になったのである。

「銘苅子」は、沖縄ならではの、王府との繋がりを描いた後日譚に変更を加えて作られたのに対し、「執心鐘入」は、伝説を背景にしつつ、別の物語として存在する後日譚を、伝説の結末と置き換える形で結合させている。王府を礼賛するという、組踊ならではの要素を取り入れるにあたり、同じ作品群の中から複数の素材を採用し、新たな筋書きを創作している点が、この組の特徴であると言えよう。

おわりに

折口信夫氏は、「組踊りの話」（初出：『日本民俗』第十二号、一九三六年六月）で

「執心鐘入」も、道成寺の飜訳だと見られる。本土でも、鐘巻といふ語を使ひ、能では蛇が鐘に這入る事になつてゐる。それを、地理・事情だけは沖縄風にしてゐるが、土地が狭いので、空想を飛躍させる事が出来ない。従つて為組み

も小さくなる。此などは、種が向うにあつてこちらの為組みを入れたのか、全然本土のものを持つて行つたのか、問題だが、私は、持つて行つたのだと考へてゐる。[21]

と述べている。話の題材としては、折口氏の述べる通りであろう。舞台や登場人物の若松などを取り入れているが、筋書きのほとんどは道成寺関連の作品に依っている。しかし、

・演劇作品でありながら、通常能では演じられなかった、道成寺伝説の前半部分を取り入れたこと

・若松が取り殺されず、女に相対する側が完全な勝利となる

という、上演の場に合わせた改変、すなわち王府の賛美を描くための改変は、注目に値すると思われる。演劇としての見所は、女の鐘入り、変身であるが、あくまでこの物語の中心は若松であり、作品は「若松の物語」の形をとっている。物語として重要なのは、言わば王府の代表である若松が助かることである。そのため、若松の受難（女に恋慕されて追われる）～若松の救出、鬼となった女の退散を、一連の出来事として描くことが必要であった。それゆえに、能のような後日譚の形を取らず、前半に道成寺伝説をくっつけるという独自の筋立てとなったのである。先に挙げた『道成寺物語』においても、伝説と後日譚が一つの作品の中で一緒に語られているものの、後日譚部分を前半部分から連続した形で描いている点は、道成寺伝説から展開する作品群の中でも珍しい形である。「執心鐘入」は、単なる能の焼き直しではなく、能やその他の演劇、そしてその背景をなす道成寺伝説を融合し、そこへ独自の文化も織り交ぜて完成された作品だと言えよう。国王を認める、すなわち国の正統性を保証する冊封使を歓待する場において、自らの国を賛美するという確固たる目的を持って作られた作品なのであり、そのために、従来の伝説と、そこから派生した後日譚の融合という、道成寺ものの新たな展開を見せることとなったのである。

注

1　一六〇九年の薩摩の琉球侵略以後に義務づけられた、琉球の使者の江戸上り（徳川将軍の襲職を慶賀するための慶賀使、国王の即位を謝恩するための謝恩使の二種。）に朝薫は二度（一七一〇年、一七一四年）参加している。
（参考）矢野輝雄『組踊への招待』琉球新報社、二〇〇一年

2　要約のため、以下に記載のテキストを使用した。
井上光貞、大曾根章介校注『日本思想大系7　往生伝　法華験記』岩波書店、一九七四年

3　要約のため、以下に記載のテキストを使用した。
馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一『新編日本古典文学全集35　今昔物語集①』小学館、一九九九年

4　要約のため、以下に記載のテキストを使用した。
黒板勝美、国史大系編修会編『新訂増補　国史大系　第三十一巻　日本高僧伝要文抄・元亨釈書』吉川弘文館、一九六五年

5　要約のため、以下に記載のテキストを使用した。
横山重、松本隆信編『室町時代物語大成　第十』角川書店、一九八二年

6　要約のため、以下に記載のテキストを使用した。
横山重、松本隆信編『室町時代物語大成　第四』角川書店、一九七六年

7　安田徳子「道成寺伝説から『京鹿子娘道成寺』へ」『聖徳学園岐阜教育大学国語国文学』巻八、一九八九年三月、一-十二頁

8　注7に同じ

9　注7に同じ

10　要約のため、以下に記載のテキストを使用した。
外間守善編『鑑賞日本古典文学　第25巻　南島文学』角川書店、一九七七年

11　末吉は、首里末吉町一丁目の末吉宮。昭和十一年、社殿と磴道が国宝に指定されるも、沖縄戦で破壊される。昭和四十七年五月、末吉宮跡として国の史跡に指定。熊野権現のお告げにより建立。末吉の寺は、その神宮寺の万寿寺。一四五七年銘の尚泰久が寄進した鐘があった。（現在鐘は県立博物館所蔵。）東恩納寛惇氏は、鐘という連想から、万寿寺が作者の考えに浮んだと推測している。

一七一九年に、冊封副使として琉球に来た徐葆光の記した『中山伝信録』でも、若松が逃げ込んだ寺を万寿寺と明記している。（参考）『琉球神道記』巻五（弁蓮社袋中著、原田禹雄訳注　『琉球神道記』　榕樹書林、　二〇〇一年）

12 東恩納寛惇　「道成寺と執心鐘入」（東恩納寛惇著、琉球新報社編　『東恩納寛惇全集8』　第一書房、　一九八〇年）（初出：伊波普猷　『校注　琉球戯曲集』　春陽堂、　一九二九年）

13 『中山伝信録』巻第二（徐葆光　『郷土史講座テキスト冊封使使録集十　中山伝信録　上』　沖縄県立図書館、　一九七六年）

14 本田安次「「道成寺」と「執心鐘入」」『芸能』三十三巻十一号、　一九九一年十一月、　十‐十四頁

矢野輝雄「沖縄の古典芸能―その歴史と現状―」『悲劇喜劇』四十一巻二号、　一九八八年二月、　二十四‐三十二頁

『中山伝信録』に見える、「執心鐘入」の初演時の記述（予め冊封使に配られた、「説帖」と呼ばれる、番組の内容を解説したものを書き写したとされる部分）では、首里に上る若松は「師に従ふ」、つまり物学びをすると記されており、池宮正治氏は、子弟の教育が寺院で行われたことから、若松も僧の弟子であり、小僧のような存在であったと解釈する（池宮正治著　島村幸一編『池宮正治著作選集2　琉球芸能総論』　笠間書院、　二〇一五年）。首里での奉公については、比嘉春潮氏が、「いわゆる奉公人は、大体村の古い家柄の子弟が首里に出て両総地頭の邸、即ち御殿・殿内に奉公し、雑役に服しつつ算数読書を学び、数年または十数年の後間切に帰り、地頭の推薦によって間切・村の役々に任職するのであった。」（比嘉春潮　『新稿沖縄の歴史』　三一書房、　一九七〇年）と述べている。「師に従ふ」＝「物学びをする」というのが、奉公の内容を詳しく説明したものなのか、初演時には師、すなわち僧の弟子となることと捉えられていたのかは判然としないが、若松が道成寺伝説の僧（いわゆる安珍）のような寺に属する僧ではないことから、ここでは僧という存在とは区別して解釈し、現在伝わる首里での奉公を、若松の旅の目的として論を進める。

15 注5 横山重、松本隆信編　『室町時代物語大成　第十』

16 「若松」については、首里王府によって編纂された歌集、『おもろさうし』に見られるなど、モデルと思われる人物の存在がある。『おもろさうし』第二　二四

安谷屋の若松
あはれ若松
枝差ちへ　浦　襲う　若松
又肝あぐみの若松

（安谷屋の若松様、人々から敬愛されている若松様は、あっぱれ、立派な方である。若い松の木が枝を広げて栄えるように、国を治め支配することよ。）

安谷屋：地名。北中城村安谷屋。

若松：人名。松の木とする説もある。

あはれ：立派な、あっぱれの意の美称辞。

肝あぐみ：安谷屋の美称。世人から愛されている。世人から待ち望まれている。

（外間守善校注『ワイド版岩波文庫390　おもろさうし（上）』岩波書店、二〇一五年）

17 要約にあたり、注10外間守善編『鑑賞日本古典文学　第25巻　南島文学』記載のテキストを使用した。

18 要約のため、以下に記載のテキストを使用した。

横道萬里雄、表章校注『日本古典文学大系41　謡曲集下』岩波書店、一九八一年

19 注1矢野輝雄『組踊への招待』

20 要約のため、以下に記載のテキストを使用した。

伊波普猷、東恩納寛惇、横山重編纂『琉球史料叢書　第五』井上書房、一九六二年

21 折口信夫全集刊行会編纂『折口信夫全集　21　日本芸能史六講（芸能史1）』中央公論社、一九九六年

（引用に際し、漢字の旧字体は新字体に改め、ルビは省略した。）